

VIA EXPRESS MAIL EL629609085US

PATENT

36856.1168

IN THE UNITED STATES PATENT AND TRADEMARK OFFICE

In re application of: Takeshi NAKAMURA

Serial No.: Currently unknown

Filing Date: Concurrently herewith

For: SPEAKER SYSTEM

TRANSMITTAL OF PRIORITY DOCUMENTS

Mail Stop PATENT APPLICATION
Commissioner for Patents
P.O. Box 1450
Alexandria, VA 22313-1450

Dear Sir:

Enclosed herewith is a certified copy of each of Japanese Patent Application Nos. 2003-032061 filed on February 10, 2003 and 2003-164936 filed on June 10, 2003, from which priority is claimed under 35 U.S.C. 119 and Rule 55b. Acknowledgement of the priority document is respectfully requested to ensure that the subject information appears on the printed patent.

Respectfully submitted,

Date: December 11, 2003



Attorneys for Applicant(s)
Joseph R. Keating
Registration No. 37,368

Christopher A. Bennett
Registration No. 46,710

KEATING & BENNETT LLP
10400 Eaton Place, Suite 312
Fairfax, VA 22030
Telephone: (703) 385-5200

日本国特許庁
JAPAN PATENT OFFICE

別紙添付の書類に記載されている事項は下記の出願書類に記載されている事項と同一であることを証明する。

This is to certify that the annexed is a true copy of the following application as filed with this Office.

出願年月日 2003年 2月 10日
Date of Application:

出願番号 特願 2003-032061
Application Number:

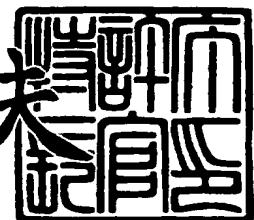
[ST. 10/C] : [JP 2003-032061]

出願人 株式会社村田製作所
Applicant(s):

2003年10月10日

特許庁長官
Commissioner,
Japan Patent Office

今井康夫



【書類名】 特許願

【整理番号】 03-0002

【提出日】 平成15年 2月10日

【あて先】 特許庁長官 殿

【国際特許分類】 H04R 3/12

【発明者】

【住所又は居所】 京都府長岡京市天神二丁目26番10号

株式会社 村田製作所 内

【氏名】 中村 武

【特許出願人】

【識別番号】 000006231

【氏名又は名称】 株式会社 村田製作所

【代表者】 村田 泰隆

【代理人】

【識別番号】 100092554

【弁理士】

【氏名又は名称】 町田 裕次治

【手数料の表示】

【予納台帳番号】 012140

【納付金額】 21,000円

【提出物件の目録】

【物件名】 明細書 1

【物件名】 図面 1

【物件名】 要約書 1

【包括委任状番号】 9004884

【ブルーフの要否】 要

【書類名】 明細書

【発明の名称】 スピーカシステム

【特許請求の範囲】

【請求項 1】 主スピーカと副スピーカとを備え、これらの各スピーカをピストン振動領域の周波数範囲内で、かつ、前記主スピーカの非加振領域を前記副スピーカによって主スピーカと同相でかつ主スピーカより小さい振幅で加振することにより、全体で疑似球面波を発生させるように構成されていることを特徴とするスピーカシステム。

【請求項 2】 前記副スピーカは主スピーカよりも口径が大きく、かつ、両スピーカは互いに同軸状に配置されていることを特徴とする請求項 1 記載のスピーカシステム。

【請求項 3】 複数の前記副スピーカを備え、該副スピーカは外側ほど小さい振幅で加振されることを特徴とする請求項 2 記載のスピーカシステム。

【請求項 4】 複数の前記副スピーカを備え、前記主スピーカは中央に、前記副スピーカは主スピーカの周囲に配置されていることを特徴とする請求項 1 記載のスピーカシステム。

【請求項 5】 前記主スピーカからの距離が異なる複数の副スピーカを備え、該副スピーカは外側ほど小さい振幅で加振されることを特徴とする請求項 4 記載のスピーカシステム。

【請求項 6】 前記主スピーカと副スピーカとはほぼ同じ音響特性を有し、2つの副スピーカの間に主スピーカが位置するように各スピーカが互いにほぼ直線状に配置されており、かつ、副スピーカ同士を互いに直列接続した上で、これを主スピーカのオーディオ信号線に並列に接続して構成していることを特徴とする請求項 4 記載のスピーカシステム。

【請求項 7】 主スピーカと副スピーカとは同一面上に配置されていることを特徴とする請求項 1 ないし請求項 6 のいずれか 1 項に記載のスピーカシステム。

【発明の詳細な説明】

【0001】

【発明の属する技術分野】

本発明は、複数のスピーカを組み合わせることにより疑似球面波の音波を発生させるスピーカシステムに関する。

【0002】

【従来の技術】

一般に、ピュアオーディオの分野で使用されるスピーカには、十分な音量を確保しつつ、円やかで豊かな音色が得られるものが要求されている。

【0003】

ところで、従来のスピーカには、振動板をコーン状に形成したコーン型スピーカや、振動板を半球面状に形成してその凸面側を発音部とした、いわゆるドーム型スピーカなどが提供されている（たとえば、非特許文献1および特許文献1参照）。

【0004】

さらに、従来技術では、同種類の同一口径のスピーカの複数個を直線状あるいは曲線状に配置した、いわゆるトーンゾイレスピーカや、互いに口径の異なるスピーカをスピーカボックスに互いに近接して配置した複合スピーカなども提案されている（たとえば、非特許文献2、特許文献2、3等参照）。

【0005】

【非特許文献1】

辻重夫編、電気・電子工学大百科事典第25巻『オーディオビデオ』、1983年11月発行、株式会社電気書院

【非特許文献2】

日本放送協会編、放送技術双書『音響機器』昭和38年7月1日発行、株式会社技報堂

【特許文献1】

特開平11-196485公報

【特許文献2】

特開平2-239798号公報

【特許文献3】

特開平5-103391号公報

【0006】

【発明が解決しようとする課題】

従来のコーン型スピーカは、コーン状をした振動板の前後のピストン運動によって音波を発生するので、大きな音量を容易に得ることができるが、振動板が前後にピストン運動するだけであるから、音波の放射波面は略平面波であって、上記のドーム型スピーカのような球面波ではないので、加振領域と非加振領域の間で空気の乱れ（渦流）が生じ、円やかで豊かな音色を得るのが難しい。

【0007】

一方、後者のドーム型スピーカは、振動板が膨らんだり縮んだりする膨縮運動をして音波を発生するため、音波は自ずと球面波になっている。そして、このような球面波は、上記のような円やかで豊かな音色を得る上では有利である。しかし、このドーム型スピーカは、コーン型スピーカのように振動板全体が動く構造ではなく、半球面状の振動板の外周縁部のみが強固に保持される構造であり、しかも、膨縮運動により音波を発生する特性上、大きな振幅が望めない。そのため、大きな音量を得るのが難しい。

【0008】

また、前述した従来のトーンゾイレスピーカは、個々のスピーカの音量や位相を変えることによって特定の方向に鋭い指向性を与えてホールや劇場でのハウリングを減少させるためのものであって、空気の乱れは考慮されておらず、音質を改善しようとするものではない。特に、複数のスピーカを曲線状に配置した構成とする場合には、各スピーカの取付角度や駆動方法が複雑で難しく、またスピーカボックスの構造が複雑で高価になる。

【0009】

なお、特許文献2には中央のスピーカの音圧を両端のスピーカの音圧より大きくするという記載がある。音圧という場合にはスピーカから一定距離離れた地点に伝わる音の圧力を指すと思われるが、大きなスピーカの場合には小さな振幅でも大きな音圧が得られ、小さなスピーカの場合は大きな振幅でも小さな音圧しか得られないということから分かるように音圧は必ずしもスピーカの振幅を意味するものではない。したがって、音圧に差を持たせたからといって空気の乱れをな

くせるものではない。

【0010】

さらに、複合スピーカは、大小の口径を有する各スピーカに音域を分担させて全体として一様な周波数特性をもつよう意図されたもので、上記と同様に、空気の乱れによる音質の劣化を改善しようとするものではない。

【0011】

それゆえに、本発明の主たる目的は、十分大きな音量を確保しつつ、空気の乱れを無くし、円やかで豊かな音色が得られるスピーカシステムを提供することである。

【0012】

【課題を解決するための手段】

本発明は、上記の目的を達成するために、次の構成を採る。

【0013】

すなわち、請求項1記載の発明に係るスピーカシステムは、主スピーカと副スピーカとを備え、これらの各スピーカをピストン振動領域の周波数範囲内で、かつ、前記主スピーカの非加振領域を前記副スピーカによって主スピーカと同相でかつ主スピーカより小さい振幅で加振することにより、全体で疑似球面波を発生させるように構成されていることを特徴としている。

【0014】

請求項2記載の発明に係るスピーカシステムは、請求項1記載の発明の構成において、前記副スピーカは主スピーカよりも口径が大きく、かつ、両スピーカは互いに同軸状に配置されていることを特徴としている。

【0015】

請求項3記載の発明に係るスピーカシステムは、請求項2記載の発明の構成において、複数の前記副スピーカを備え、該副スピーカは外側ほど小さい振幅で加振されることを特徴としている。

【0016】

請求項4記載の発明に係るスピーカシステムは、請求項1記載の発明の構成において、複数の前記副スピーカを備え、前記主スピーカは中央に、前記副スピーカ

カは主スピーカの周囲に配置されていることを特徴としている。

【0017】

請求項5記載の発明に係るスピーカシステムは、請求項4記載の発明の構成において、前記主スピーカからの距離が異なる複数の副スピーカを備え、該副スピーカは外側ほど小さい振幅で加振されることを特徴としている。

【0018】

請求項6記載の発明に係るスピーカシステムは、請求項4記載の発明の構成において、前記主スピーカと副スピーカとはほぼ同じ音響特性を有し、2つの副スピーカの間に主スピーカが位置するように各スピーカが互いにほぼ直線状に配置されており、かつ、副スピーカ同士を互いに直列接続した上で、これを主スピーカのオーディオ信号線に並列に接続して構成されていることを特徴としている。

【0019】

請求項7記載の発明に係るスピーカシステムは、請求項ないし請求項6のいずれか1項に記載の発明の構成において、主スピーカと副スピーカとは同一面上に配置されていることを特徴としている。

【0020】

【発明の実施の形態】

【実施の形態1】

図1は本発明の実施の形態1におけるスピーカシステムの正面図、図2は同スピーカシステムを構成する各スピーカの配置状態を示す側面図である。

【0021】

この実施の形態1のスピーカシステム1は、主スピーカ11と副スピーカ12とを有し、両スピーカがスピーカボックス13の前面側の同一面上において互いに同軸状に配置されている。この場合の各スピーカ11, 12は、たとえば、コーン型ダイナミックスピーカが使用されており、副スピーカ12の開口面積は、主スピーカ11の開口面積よりも略2倍程度大きくなるように設定されている。そして、主スピーカ11と副スピーカ12とは、共にオーディオ信号線14に接続されている。

【0022】

上記構成のスピーカシステム1において、オーディオ信号線14を介して入力されるオーディオ信号は、主スピーカ11と副スピーカ12とに共通に印加される。その際、オーディオ信号が、各スピーカ11, 12のピストン振動領域の周波数範囲内である場合、副スピーカ12は、主スピーカ11の非加振領域において、主スピーカ11と同相でかつ約1/2の振幅で加振されることになる。その結果、図2の二点鎖線で示すように、このスピーカシステム1全体として見た場合の放射波面は疑似球面波17になる。

【0023】

このように、この実施の形態1では、主副の各スピーカ11, 12は共にコーン型ダイナミックスピーカで構成されているので、ドーム型の同じ大きさのスピーカを使用する場合よりも十分大きな音量が得られる。また、主スピーカ11と副スピーカ12とは共に同一面上に配置されており、しかも、副スピーカ12は、主スピーカ11の非加振領域を主スピーカ11と同相でかつ約1/2の振幅で加振されるので、スピーカシステム1全体としては球面波に近い放射波面となる。このため、円やかで豊かな音色が得られる。また、空気の乱れが少なく、音を無理なく伝えることができ、しかも音源が散在することができないため、広いリスニングポジションが得られる。

【0024】

[実施の形態2]

図3は本発明の実施の形態2におけるスピーカシステムの正面図、図4は同スピーカシステムを構成する各スピーカの配置状態を示す側面図である。

【0025】

この実施の形態2のスピーカシステム2は、主スピーカ21とこれを挟むように配置された上下一対の副スピーカ22とを有する。これらの各スピーカ21, 22は、いずれもほぼ同じ音響特性を有するコーン型ダイナミックスピーカが使用されており、これらの各スピーカ21, 22はスピーカボックス23の前面側の同一面上において縦方向にほぼ直線状に配置されている。なお、配置方向は横方向でももちろん構わない。

【0026】

そして、このスピーカシステム2では、副スピーカ22同士を互いに直列接続した上で、主スピーカ21に直結されたオーディオ信号線24に対して並列に接続されている。

【0027】

上記構成のスピーカシステム2において、オーディオ信号線24を介して入力されるオーディオ信号は、中央の主スピーカ21に対してはそのままの信号レベルで入力されるが、上下の副スピーカ22は直列接続されているため、各々の副スピーカ22に対しては略1/2のレベルのオーディオ信号が入力される。

【0028】

したがって、入力されるオーディオ信号が各スピーカ21, 22のピストン振動領域の周波数範囲内である場合、副スピーカ22は、主スピーカ21の非加振領域において、主スピーカ21と同相でかつ約1/2の振幅で加振されることになる。その結果、図4の二点鎖線で示すように、このスピーカシステム2全体として見た場合の放射波面は疑似球面波27になる。

【0029】

このように、この実施の形態2では、主副の各スピーカ21, 22は、ほぼ同じ音響特性を有するコーン型ダイナミックスピーカを組み合わせて構成されているので、主副の各スピーカ21, 22は小口径のものであっても、全体で大口径スピーカと同程度の音量感と小口径スピーカならではの音の繊細さという両方の特徴を得ることができる。

【0030】

また、主副の各スピーカ21, 22はいずれも同一面上に配置されていて、しかも、副スピーカ22は、主スピーカ21の非加振領域を主スピーカ21と同相でかつ約1/2の振幅で加振されるので、スピーカシステム1全体として球面波に近い放射波面となる。その結果、空気の乱れがなく、円やかで豊かな音色が得られる。

【0031】

また、各スピーカ21, 22は互いの位置をずらせて配置されているので、実施の形態1のように、主スピーカ21からの放射音が副スピーカ22到達するな

どして相互の音の干渉による変調現象が生じるのを有効に防止することができ、音の乱れが少なく、音を無理なく伝えることができる。

【0032】

さらに、主スピーカ21と副スピーカ22とは共にスピーカボックス23の同一面上に縦一列に配置されているので、スピーカボックス23の構造が単純となり、また接続もシンプルなので低価格化を図ることができる。

【0033】

なお、上記の実施の形態2では、副スピーカ22を互いに直列接続することによりオーディオ信号の振幅が1/2となるようにしたが、その代わりに、各副スピーカ22に対して個別にアッテネータを接続して各副スピーカ22に加わるオーディオ信号の振幅を1/2に減衰させる構成とすることも可能である。さらには、主スピーカの入力インピーダンスより副スピーカ22の入力インピーダンスを大きくしたり、あるいは副スピーカ22として主スピーカ21より能率の悪いものを採用したりすれば、主スピーカ21と副スピーカ22に同じ信号を印加するような構成とすることも可能である。

【0034】

また、この実施の形態2では、主副の各スピーカ21, 22を直線状に配置したが、これに限らず、たとえば、図5に示すように、主スピーカ21を中心にして左右上下にそれぞれ副スピーカ22を配置して疑似球面波を発生させる構成とすることも可能である。さらには、主スピーカ21を中心にして同心状に副スピーカ22を配置した構成とすることも可能である。

【0035】

また、上記の各実施の形態1, 2では、主スピーカ11に対して同軸状に1つの副スピーカ12を配置したり、主スピーカ21からほぼ等距離の位置に複数の副スピーカ22を配置したりしているが、同軸状の場合は3重以上に、小さなスピーカを複数設ける場合は主スピーカからの距離がさらに離れた位置に別の副スピーカを設けるような構成でも構わない。その場合には、外側あるいは主スピーカからの距離が離れた副スピーカほど小さい振幅で加振されることになる。

【0036】

さらにまた、上記の各実施の形態1，2では、主スピーカ11，21と副スピーカ12，22とは共に同一面上に配置した構成としている。このようにすればスピーカシステム全体からの放射波面を球面波に一層近づけることができるため好ましいが、主スピーカ11，21に対して副スピーカ12，22の位置を多少後退させて配置とすることも可能である。

【0037】

【発明の効果】

請求項1記載の発明に係るスピーカシステムは、主副の各スピーカはピストン振動により音波を発生するため十分大きな音量が得られる。また、副スピーカは、主スピーカの非加振領域を主スピーカより小さい振幅で加振されるので、スピーカシステム全体として疑似球面波の音波が放出されるため、空気の乱れが少なく、音を無理なく伝えることができ、円やかで豊かな音色が得られる。

【0038】

請求項2および3に記載の発明に係るスピーカシステムは、請求項1記載の発明の効果に加えて、主スピーカと副スピーカとが互いに同軸状に配置されているので、音源が散在することなく、広いリスニングポジションが得られる。

【0039】

請求項4および5記載の発明に係るスピーカシステムは、請求項1記載の発明の効果に加えて、主スピーカを中心にしてその周りに複数の副スピーカを配置した構成なので、それぞれのスピーカは小口径のものであっても、全体で大口径スピーカと同程度の音量感と小口径スピーカならではの音の繊細さという両方の特徴を得ることができる。しかも、主スピーカからの放射音がその外側の副スピーカに直接到達するなどして相互の音の干渉による変調現象が生じるのを有効に防止することができ、音の乱れが少なく、音を無理なく伝えることができる。

【0040】

請求項6記載の発明に係るスピーカシステムは、請求項4記載発明の効果に加えて、極めて簡単な電気的接続構成でもって副スピーカを、主スピーカと同相でかつ約1/2の振幅で加振することができる。さらに、主スピーカと副スピーカとは共にほぼ一列に配置されているので、スピーカボックスの構造が単純となり

、接続もシンプルなので低価格化を図ることができる。

【0041】

請求項7記載の発明に係るスピーカシステムは、請求項1ないし請求項6の発明の効果に加えて、主スピーカと副スピーカとが同一面上に配置されているので、スピーカシステムからの放射波面を球面波に一層近づけることができる。

【図面の簡単な説明】

【図1】 本発明の実施の形態1におけるスピーカシステムの正面図である。

【図2】 図1のスピーカシステムを構成する各スピーカの配置状態を示す側面図である。

【図3】 本発明の実施の形態2におけるスピーカシステムの正面図である。

【図4】 図3の同スピーカシステムを構成する各スピーカの配置状態を示す側面図である。

【図5】 本発明の実施の形態2の変形例を示すスピーカシステムの正面図である。

【符号の説明】

1, 2 スピーカシステム

11, 21 主スピーカ

12, 22 副スピーカ

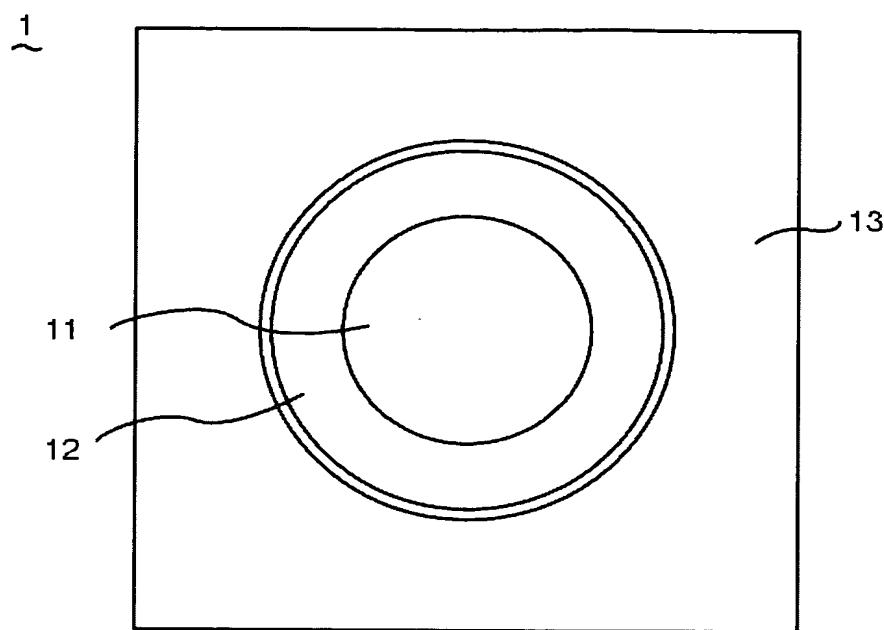
13, 23 スピーカボックス

14, 24 オーディオ信号線

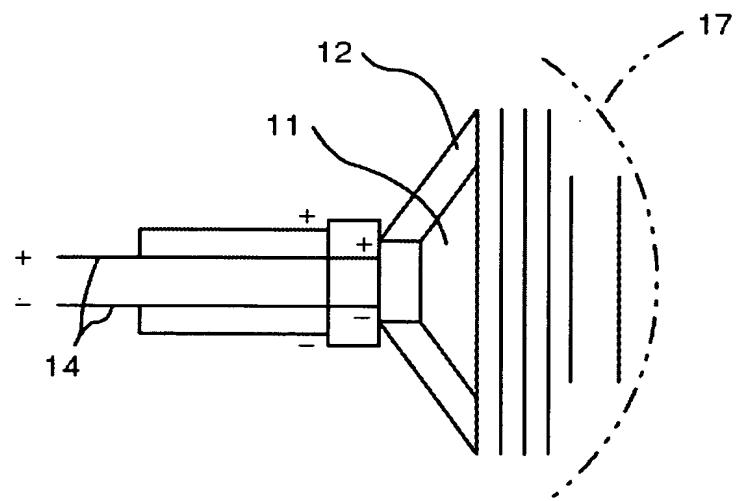
17, 27 疑似球面波

【書類名】 図面

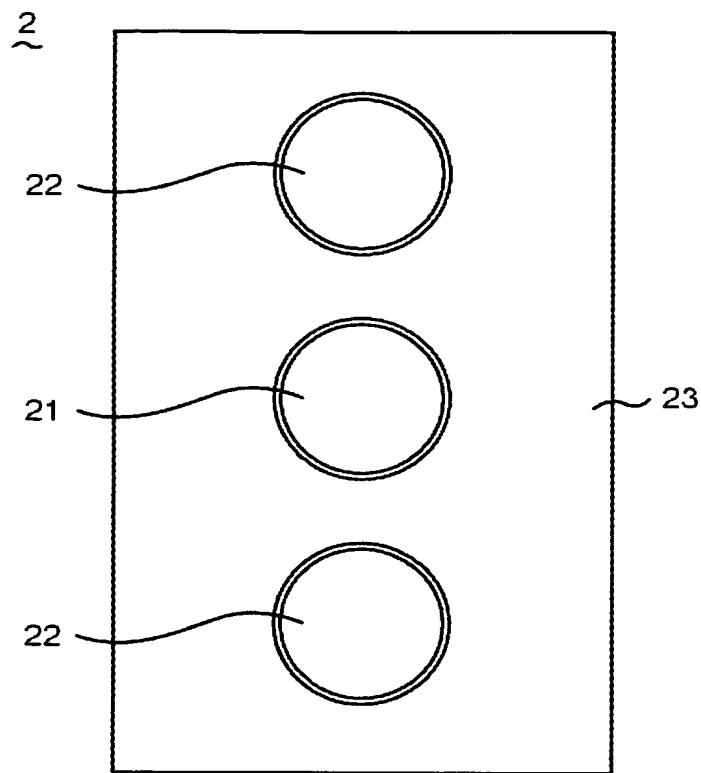
【図1】



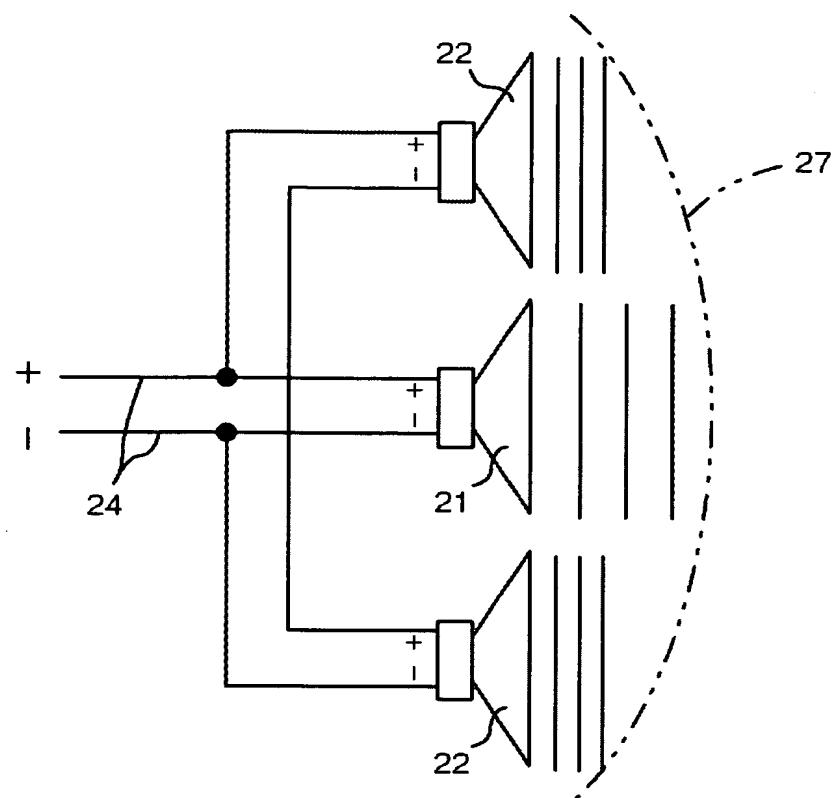
【図2】



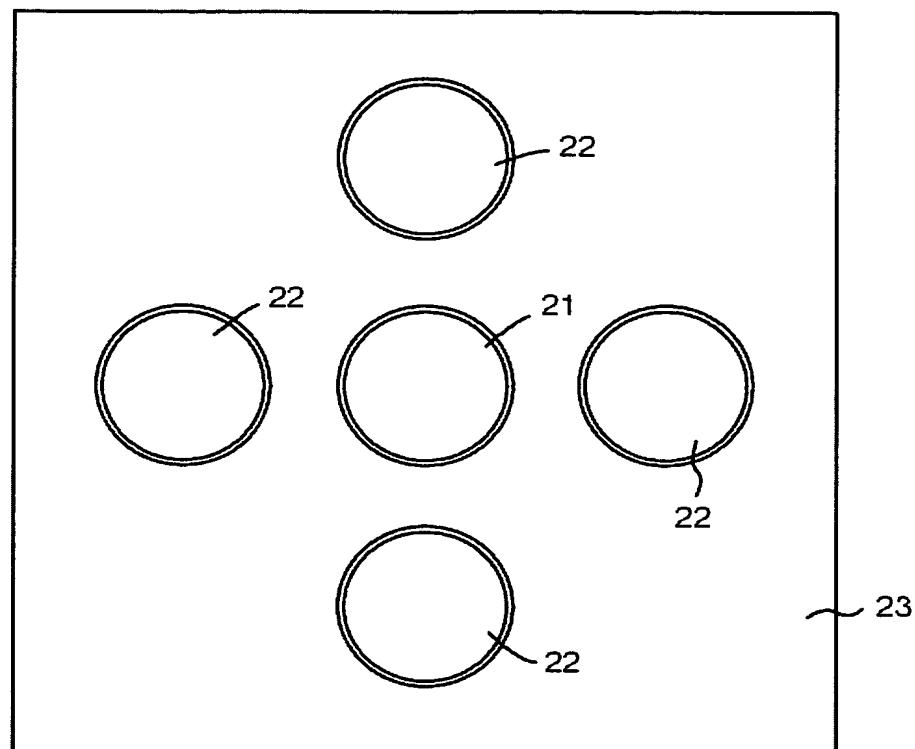
【図3】



【図 4】



【図 5】



【書類名】 要約書

【要約】

【課題】 十分大きな音量を確保しつつ、円やかで豊かな音色が得られるスピーカーシステムを提供する。

【解決手段】 主スピーカ11と副スピーカ12とを備え、副スピーカこれらの各スピーカ11, 12をピストン振動領域の周波数範囲内で、かつ、主スピーカ11の非加振領域を副スピーカ12によって主スピーカ11と同相でかつ約1/2の振幅で加振することにより、全体で疑似球面波17が発生するように構成されている。

【選択図】 図1

特願2003-032061

出願人履歴情報

識別番号 [000006231]

1. 変更年月日 1990年 8月28日

[変更理由] 新規登録

住所 京都府長岡京市天神二丁目26番10号
氏名 株式会社村田製作所